令和７年度地方やデジタル分野における専修学校理系転換等推進事業

クラウドサービス、生成AI等、最先端テクノロジーを現場に導入、もしくは導入を検討している病院での業務環境、そこで働く人材に求められるスキルセットの調査

報告書

2026年2月25日

実施概要

- **スマート医療／医療DXに先進的に取り組む医療施設に訪問調査**
- **実証検証委員会での意見交換**

（目的） イノベーティブな最先端の病院を調査することで、現状の現場の解像度を高めること、併せて令和１０年に就職先の状況を予測するための基礎情報とする

①先進的な医療施設への訪問調査

②実証検証委員会等での意見交換

令和6年度に示したAI人材イメージ

バックオフィス業務・医療事務業務の効率化について、AIを活用(1)して、診療情報管理士として必要な知識・情報から医療現場のニーズに基づく改善プロセスの実践(2)を企画・実施できる人材

育成像と教育要件（仮説）		該当するカリキュラムの変更・追加部分
(1) AIを活用 【主に生成AI】	• 医療システム運用に向け、まずは業務効率化の観点から、AI技術を導入・活用できる ➢ 業務改善プロセスでのAI技術の活用 • AI活用に関する自己学習を続けるための基礎知識・素養が身についている ➢ 業務内へのAI技術の導入	• IT・AIリテラシー • データ分析・統計学（データサイエンス） • 医療情報技師対策授業（プログラミング、ネットワーク構築、データーベース管理、セキュリティ対策等） • 実習のアップデート
(2) 改善プロセスの実践	• 医療現場と情報技術の橋渡しをすることができる • 医療現場の業務分析と改善プロセスの考え方を習得している	• IT・AIリテラシー • 医学的知識、専門用語 • コミュニケーション • 実習前後指導等
	• 業務改善に向けてデータを用いて検証しながら進めることができる（なぜそういえるか、説明できる）	• データ分析・統計学 • 実習のアップデート

①先進的な医療施設への訪問調査

- 先進施設とて、HITO病院（愛媛県四国中央市）に訪問し、実務課題と採用ニーズをヒアリング

1．現場の「分断」と自動化ニーズ

現場ヒアリングで見えた課題（Reality）

- 事務負荷：レセプト点検、文書作成、問い合わせ対応等の定型業務が圧迫
- データの分断：部門ごとにデータが孤立し、横断的な経営判断に使えていない
- 本質的課題：「記録はあるが、意思決定に使い切れていない」

RPO（業務プロセス最適化）の視点

- 単なる「人手不足」ではない
- 自動化ニーズ：予約最適化、シフト作成、在庫管理
- 目的：人が「患者対応」に使う時間を最大化するための自動化

2．病院課題と教育課題の対応

	病院側の現状課題	現場への影響	教育側で必要な強化点
1	レセプト・文書の定型業務過多	人手が事務作業に固定される	業務自動化設計（RPA/LLM活用の実務演習）
2	データが部門ごとに分断	全体最適の判断が遅れる	データ構造化・連携設計の基礎訓練
3	DXを進める実行人材の不足	改善が属人化・一過性になる	PBL型訓練（企画→実装→振り返りのサイクル）

①先進的な医療施設への訪問調査

- 先進施設とて、HITO病院（愛媛県四国中央市）に訪問し、実務課題と採用ニーズをヒアリング

求める人材像の再定義

従来の「分析専門職」

データを分析しレポートを出すだけでは不十分。現場は「分析結果」ではなく「業務が楽になること」を求めている。

現場との対話力

医療安全・倫理・個人情報保護を前提に、医師や看護師と対話し、現場のリスクを理解できる能力。

「業務改善の実装者」

AIを安全に業務へ組み込み、運用改善まで落とし込む企画実行力（Implementation）を持つ人材。

②実証検証委員会での意見交換

- 令和6年度を含む、委員会等での議論から人材に求める要素を整理。

1. 現場理解と文脈把握
   （現場文脈の理解力、業務間の因果関係の把握力、AI活用前提条件を判断できる力）
2. 専門知の統合と翻訳能力
   （分野横断的な理解力、チーム内での知識共有の促進、専門性に基づく翻訳・説明力）
3. 共感的コミュニケーションと調整力
   （説明責任力・共感的対話力、多職種間協働スキル、合意形成につなげる調整力）
4. 課題を発見・構造化できる力
   （課題抽出・構造化の思考力、問題設定力（Whyを問う）、課題を共有可能な形で言語化する力）
5. 倫理的・法規的判断力
   （情報倫理・法規遵守判断、倫理的ジレンマに対する判断過程リスク認識と説明責任の履行）
6. 現場改善と継続的学習姿勢
   （リスキリング・自己更新能力、現場改善の推進姿勢、フィードバックを通じた成長意欲）

②実証検証委員会での意見交換

1. 現場実習で育成すべきこと

育成項目①：課題を発見・構造化できる力

✓専門知識を活用し、他の項目につながる土台となる。

育成項目②：共感的コミュニケーションと調整力／現場改善と継続的学習姿勢

✓現場で重要だが、実際に実習期間内の習得は難しく、雇用後のOJTとの線引も必要。

事前に求めたいポイント

✓プレゼンテーション力、現場でのコミュニケーション・接遇面は重要。

✓項目によって病院の戦略・戦術の理解も必要となるのではないか。

2. 育成達成に必要な実習の方向性

受入側の姿勢について

✓実習生の**課題発見力や思考の柔軟性**を鍛えることの重視。

✓実習生が利用できるデータの内容・取扱いの整理・コンセンサスが必要。

定量的に示せる成果物が理想（例：業務改善策の発見や患者満足度の調査分析など）

✓学生のアウトプットが変わるという形式的な変化。

受入側の準備について

✓**課題発見・構造化する対象の事前合意**が必要。

（例：医療機関側で示す課題を考える提示式や外来全般を回りながら改善ポイントを探す探索式）

✓実習を担当する部門（教育部門など）とのコミュニケーション。

✓医療施設側がどこまで伴走できるか／すべきか。

総括

従来の診療情報管理士が持つべき専門性に加えて必要となる要素

テクニカルスキル（分析専門職）

- AIやDX技術に関する基礎知識
- 専門性を活かしてAIやDX技術を応用するための知識

コミュニケーションスキル（現場との対話力）

- 現場理解と文脈把握
- 専門値の統合と翻訳能力
- 共感的コミュニケーションと調整力

コンセプチュアルスキル（業務改善の実装者）

- 課題を発見・構造化できる力
- 倫理的・法規的判断力
- 現場改善と継続的学習姿勢